

【しゃべるけん】

忍者ごっこも慣れてくると、新聞紙をまるめた剣ではなく、本物の剣を手にしてみたくなりました。

すると、たまたま縁の下に隠れているときに、なにか誘われるものがあった、土を掘ってみると、油紙で包んだ剣が見つかりました。

短い剣で、忍者にはもってこいです。

「よっしゃ」

と、それを持ち出して、ともだちに自慢していると、抜いてみてくれと云う。

「よっしゃ」

と、抜こうとするのだが、錆び付いているのか、抜けない。

みんながせつつくので、ぼくは焦ってきて、石で剣の柄を叩いていると、

「痛え、痛え」

と、騒ぎます。

「だれじゃ」

と聞くと、

「剣じゃ」

と答える。

「けんが、しゃべるもんか」

と云うと、

「たまには、しゃべる」

と答える。

「どういうときに、しゃべるんか」

と聞くと、

「痛えときにしゃべる」

と答える。

「ぬけないから、いたいめにあうんじゃ」

と云うと、

「俺は、お前には抜けない」

と云う。

「なぜじゃ」

と聞くと、

「俺は、人を斬るときしか抜けない」

と云う。

癩（しゃく）にさわったので、

「きるぞ、きるぞ」

と云うと、

「忍者は、人を斬らない」

と云う。

その言い方は気に入った。

つまり、ぼくは忍者だから、剣を抜けないのだ。

ぼくは納得して、剣を元のところに戻したのです。